# 頌栄 No. 126



日本キリスト教団 頌栄教会

〒155-0031
世田谷区北沢 1-42-10
Tel 03-3467-3664
Fax 03-3467-8332




## 賜物にはいろいろある

牧師　清弘　剛生

**賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。**
**（１コリント12・４～６）**

ここで繰り返されている言葉があります。「いろいろありますが」という言葉です。この世では、能力や資質が「あるかないか」が重要視され、そこで他者との比較が起こります。しかし、聖書は「あるかないか」ではなく、「いろいろある」と言うのです。あの人に与えられているものが自分にないならば、自分には別なものが与えられているのです。

「賜物（カリスマ）」は「恵み（カリス）」という言葉に由来します。自分の努力で獲得したものでも、行いに対する報酬でもない、純粋に恵みとして与えられたものです。ならば、それは他者に誇るべきものではなく、あくまでも仕えるためのものです。「務め」とは、もともと食卓で給仕をすることなどに用いる言葉です。賜物がいろいろあるのは、仕え方がいろいろあるからなのです。ですから、高ぶってはならず、卑下してもなりません。高ぶりも卑下も、自分に与えられている務めを見失わせるからです。

また、パウロは「同じ」という言葉も繰り返します。「同じ霊」「同じ主」「同じ神」。私たちの側は「いろいろ」です。しかし、それは同じ神に仕えるための「いろいろ」であり、共に仕え、互いに補い合うための「いろいろ」なのです。

聖霊の与える「賜物」は、私たちの思いを遥かに超えて豊かな広がりを持っているはずです。「いろいろある」のですから。これまであまりうれしいと思ってこなかったもの、なぜこれが自分に与えられているのだろうと思っていたものこそが、もしかしたら他者を補い、特別な務めのために与えられている聖霊の賜物なのかもしれません。それが賜物であるならば、恵みによって与えられているのです。

（9月「年度主題を覚えてささげる礼拝」より）

## 召天された方々に思いを寄せて

M・E

私は教会のお祖母様方が大好きです。30歳になっても40歳になってもいつも甘えられるからです。召天者記念に寄せて、そんな大好きなお祖母様方を思い出してみます。

○まずは祖母の佐藤道子です。頌栄教会のキャンプが海だった小学生の頃、帰り道に迷い、あっちだこっちだと兄と祖母の意見が分かれ険悪になりました。

私は、そんなことより、教会の方々がキャンプ場で待っておられることの方が心配で、恥ずかしいのによく喧嘩してられる！と思った事を覚えています。

○Kさんは、いつも優しく声を掛けてくださいました。30歳頃の私は余裕が無く、共働きでいつも疲れ果てていました。娘と息子を見ては「可愛い可愛い」と、言ってくださり、可愛いとあまり感じていなかった私の代わりに愛情を注いで下さいました。外の看板の説教題目の毛筆は達筆で、お人柄を表す文字でした。

○Bさんは娘の七五三礼拝の為に着物を階下ホールで着せてくださいました。一度礼拝後にご自宅へご一緒させて頂き、娘と昼食をご馳走になりました。よそのお宅のきちんと整った暮らしぶりを娘は体験して学ぶことが出来ました。

○Tさんは、人知れず台所の流しをさっと手短にいつも綺麗にされておりました。人の見ていない所で働く姿を学びました。

○Sさんは、夏のキャンプで手作り弁当を作ってきてくださいました。バスの中でずっとお喋りし、楽しい時間を過ごしました。時々、仕事の話をすると、「意地悪な人がいるんだねー、可哀そうだね、負けるんじゃないよ」と励ましてくださいました。40歳になっても甘えたい、こういった言葉が欲しかったのです。

○Mさんは、幼児教育の大先輩。いつも誇り高く、きちんとした身なりで思い出すたび自分の姿を反省します。心意気は服装に表れることを学びました。

○Aさんのお母様とは、キャンプの時に腕を組んで段差のある食堂までご一緒しました。なんとも温かい腕のぬくもりを今でも思い出します。

○Nさんは、実母、姑双方を教会に連れてきていらっしゃる方でした。結婚当初姑の言葉に振り回されたくないと、受洗を決意した私はびっくりしました。

○K先生は渋谷の交差点で大の字になって転んだ事をお話ししてくださ

いました。先生だって転ぶんだから、私が転んだって当然の事！と、いつも何か失敗した時にこの話を思い出します。

上記、私はお祖母様好きですが、男の方も少し思い出してみます。

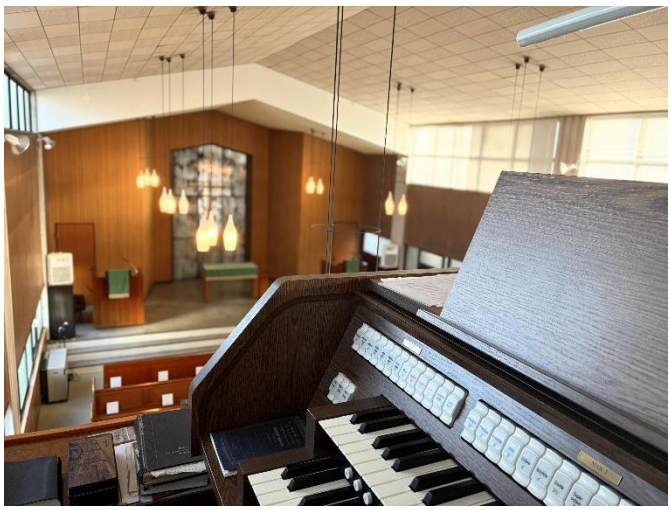
昔の週報にはお名前と共に所在地まで記載されていました。ならばと、時々見知らぬ教会員の方に葉書を書いていました。

Sさんには時々、老人施設からお返事を頂き、桜の季節の美しさを文章の中で教えて頂きました。一度もお会いしたことはないけれど、つながりを感じ、召天者名簿に名前が載ると思い出しています。天国でお会いできるのが楽しみです。

礼拝の中で、牧師先生がおっしゃる、「天の国と地の国で共に礼拝を捧げましょう」とは、召天された方々との交流を思い出すと少し理解できた気がします。天に居るか、地に居るか、上か下かの事で、神様でつながっているから死は怖いものではないのかな～？？！まだ少し怖さが残る50代の私です。

この原稿を書いていて、ハッとしたことがあります。それは、以下についてです。

私は37歳から50歳まで目白ヶ丘教会のI先生にオルガンをお習いしに通っていました。ご自宅にはピアノ、パイプオルガンもありましたが、私はリードオルガンを教えていただいていました。先生のお言葉で、「礼拝の奏楽は牧師より前に弾くのよ、だから無心になってはだめ、祈るのよ」を、覚えています。なので、いつも私は礼拝堂の参加者のお顔を見て、その方の為にお祈りしています。また、目に見えない病床の方にも代わりに祈るつもりで弾いています。でも、天国の、召天された方々を思っては弾いていなかったことに今回、気が付きました。次回より、天にも地にも集中して祈る奏楽に励みます。



## 私が求道者だった頃

N・N

父母双方共、祖父母の代からクリスチャンだった家庭に生まれました。但し母方は内村鑑三氏の教えを受けた無教会派、父方は当時の自宅近くのルーテル教会の会員でしたが、父は昭和の典型的な「モーレツ社員」で転勤も多く、両親とも私が幼い頃は神様への関心は薄いように思われました。

私が神様の教えに触れたのはむしろ、小学校時代に通ったカトリックの学校によってでした。毎朝の礼拝の他に週一時間「宗教」の時間もあり、まだ「信仰」には至りませんでしたが、神様の教えの基本的なところはその時代に心に刻まれたように思います。

その後、父の転勤によりその学校は辞め、中学・高校・大学までは教会とはほぼ無縁の生活をしておりました。しかし大学院に進学した頃だったと思いますが、当時住んでいた八王子市内に、昔、目白にあった「ロゴス教会」が移転してきたということを、たまたま新聞の小さな記事で読みました。山本三和人先生という当時既に八十代の牧師が何十年も「反戦」を訴えて牧会しておられるとの内容に不思議と目が留まり、たまたま自宅の近くだったので行ってみようと思いました。昔、目白では英語学校の経営などで「羽振りの良い」教会だったそうですが、破産に近い形で八王子に移ってからは本当に小さな教会で、若者は珍しかったので歓迎されました。山本先生はやせた小柄なおじいちゃんでしたが、カフカ、ドストエフスキーなどの文学の奥にある神への信仰について、独特な、しかし大変力強い説教をされる方でした。その内容をきちんと理解していたとはとても言えませんが、その小さな教会の雰囲気が心地よかったのと、さらに小さな聖歌隊ができて讃美歌を歌うのが楽しかったので、「何となく」通い続けました。当時銀座教会から応援に来られていたオルガニストの方に、オルガンの弾き方のごく初歩を教わったのもその頃でした。

そんな生活が二、三年続いた後、これといった霊的な体験があったわけでも、特に強く「主を求めたい」渇望があったわけでもなく、「これでいいのかな」という迷い満載だったのですが、誘われるまま二十代半ばで受洗しました。その数年後に結婚して北沢に転居したのに伴い、頌栄教会に転会させていただき、今に至ります。

私が受洗したロゴス教会は極めて寛大というか「ゆるい」というか、受洗前教育などはほぼなく、清弘先生からきちんと教育を受けている頌栄教会の受洗者の皆さんを見ると、私の信仰はこれでいいのか、と今でもコンプレックスさえ感じることがあります。それでも、ロゴス教会移転の記事に目を留めさせ、教会へと誘ってくださったこと、たいした自覚もない私を快く迎えて教会の「心地よさ」を味わわせ、ずっとここに繋がっていたいと思わせてくださったことは、やはり神様の導きだったのだろうと今は思えます。受洗から四十年も経ちながら未だに「求道者」のような状況ですが、これからもずっと、私にとっての神様を探し求め続けていきたいと思います。

## 特別礼拝
## ハンドベルの調べと共に

石川　和幸

9月13日の礼拝ではハンドベルクワイヤ「ＡＬＰＨＡ」の方々をお迎えして特別礼拝「ハンドベルの調べと共に」を主に捧げました。

「ＡＬＰＨＡ」は、日本ハンドベル連盟直属のクワイヤとして長年活動をされています。また、妻の緑が生前にメンバーとして参加していたハンドベルクワイヤでもあります。

今回の特別礼拝は、昨年9月13日に行った緑の記念会と、翌日の礼拝に続き2年連続での奉鐘となりました。「ＡＬＰＨＡ」のみなさんにとっては、天に召されたメンバーが通っていた教会での演奏でもあり、天に届ける気持ちで演奏していたそうです。

当日は9月の召天月礼拝でもあり、多くのご遺族が来会されたことも感謝です。

礼拝後にはミニコンサートもあり、美しい調べは確かに天にも届いたことでしょう。

「ＡＬＰＨＡ」のみなさまに感謝申し上げます。





## 召天者記念礼拝をお捧げして

碓井　晴惠

頌栄教会では、毎年十一月の第一日曜日に召天者記念礼拝をお捧げしています。今年は十一月一日でした。

礼拝堂には召天者のお名前を額に入れて掲示し、すでに天に召された方々を記念し礼拝をお捧げします。

今年も多くのご遺族が来会してくださり、礼拝堂がいっぱいになりました。礼拝堂を見渡せば、召天された方々が以前に座っていらした席がそれぞれにあり、共に過ごした時を思い出します。

当日は「恵みの善い管理者として」という説教題で御言葉を取りついでいただきました。私たちは神さまからそれぞれ賜物をいただいています。それは期間限定で神さまから託されているもの。多く託された人も、少しだけ託された人もいますが、最後は全て手放すことになります。その賜物をどれくらい用いて仕えることができたのか、それが大事であることを学びました。

先に天に召された方々は託された賜物を用いて仕えてくださった方々で、私たちはその方々から多くのものを受け取ってきたとのメッセージに改めて感謝しました。私たちも終わりに向かっている者として諸先輩に倣い、託されているものを用いて仕えていく者でありたいと思います。

なお、頌栄教会では毎月第二日曜日に「召天月礼拝」をお捧げしています。その月に天に召された方のご遺族とともに礼拝をお捧げしています。どうぞこちらも覚えてご出席ください。



## 10・11月の教会学校

### 児童部会

いつも教会学校のためにお祈りくださり、ありがとうございます。

毎週の礼拝を、子どもたちと一緒にささげられることに感謝しています。

10月11日からの一か月は、教会学校奨励月間でした。受付ロビーと一階ホールに、子どもたちやクラスの様子がわかる写真などを掲示。子どもたちを見ていただきたい、声をかけていただきたいと呼びかけたところ、礼拝中の子どもの様子を気にかけてくださる方や、小学生クラスを参観される方もあり、とても嬉しいことでした。子どもたちが近くにいて、成長を見られることは、教会生活における恵み（責任でもありますが）のひとつだと思います。これからも、教会全体で子どもを見守り、成長をともに喜んでいかれますことを願っています。

11月8日は、子ども祝福礼拝でした。教会員のお子さん、お孫さん、当日の召天月礼拝に出席されたご遺族のお子さんを含めて11名が出席して、清弘先生より一人ずつ祝福を受けました。

そして礼拝後には、幼児から中学生を対象にした特別クラスを持ちました。「礼拝順序穴埋めクイズ」では、式順をよく覚えている様子や、年上の子どもが年下の子どもを手伝う姿が見られ、協力してすべてを正解して、喜びに満たされました。続けて、清弘先生から礼拝の最初「招詞」の説明と、「毎週みんなが礼拝に集まるのは、神さまが招いてくださっているからです。そして招いてくださるのは、神さまがみんなのことを大好きだからです」というお話がありました。

アドベントより、礼拝の聖書朗読の前に、主に子どもたちに向けて「説教導入」が語られるようになります。大人も子どもも、みことばをより近く、親しく受け取り、神さまの子どもとして、ともに歩んでいきたいと思います。



清弘先生による特別クラス
「礼拝順序穴埋めクイズ」

# 世界宣教礼拝

説教要旨

二〇二六年十月四日

聖書：使徒言行録17章22－27節

佐味　湖幸　宣教師

## 導入：国際移民の時代

現在は「国際移民の時代」と呼ばれています。旅行や留学、仕事のために国境を越える人がいる一方、戦争や迫害、災害によって、自らの意思とは関わりなく故郷を離れなければならない人々もいます。日本にも昨年は四千二百万人を超える外国人が訪れ、一年以上この国に暮らす在留外国人も四百十二万人を超えました。私たちは、こうした人の移動の背後に、神様の御手と目的があると信じています。

## Ⅰ パウロのアテネ宣教　1節、16－21節

第二次宣教旅行の途上、迫害を受けてアテネに移ってきたパウロは、町に偶像があふれているのを見て心を痛めました。哲学と文化の中心であったアテネの人々は、真の神ではなく偶像を拝み、人間の考えによって生きていました。神の存在をなんとなく認めながらも哲学に従って歩む人もいれば、あらゆるところに霊的な存在があると考え、それを恐れて生きる人もいたのです。パウロは会堂で福音を語った後、アレオパゴスで、聖書を知らないギリシアの人々に語りかけます。そのとき彼は、旧約の預言の成就としてキリストを語る会堂での方法とは別のアプローチをとりました。

## Ⅱ 世界を支配しておられる神　22－25節

「あなたたちは間違っている」と責めるのではなく、まず彼らと同じところに立ち、「知られざる神に」と刻まれた祭壇を手がかりにして、その知られざる神こそ天地万物を造られた主であると宣言したのです。この方は人の造った神殿に閉じ込められる方ではなく、人に世話をしてもらわなければ立ち行かない方でもなく、すべてのものに命と息を与えておられる方です、と。

天地を造られた神を知らない人が多い日本においても、創世記の初めから、この世界を造られた方がおられること、その方が御子イエス・キリストを遣わして私たちのための救いの道を開いてくださったことを伝えることが、何より大切です。

## Ⅲ 神を求めさせるために　26－27節

続いてパウロは、神が一人の人からすべての民族を造り出して地上の至るところに住まわせ、季節と居住地の境界を定められたと語ります（26節）。神は初めから、人が地に満ち広がることを願っておられました。ところが人はバベルの塔を築いて一か所に集まり、自分たちの名を高めようとしました。そこで神は言葉を混乱させ、人を全地に広がらせたのです。国々の興亡も人々の移動も、偶然ではありません。神は主権をもって歴史を支配しておられます。その目的は「人に神を求めさせるため」（27節）です。

実際、故郷を離れ、言葉も文化も違

う中で、頼りにしてきた価値観が揺さぶられるとき、人は確かなものを求めるようになります。海外に留学した日本人が初めて教会の扉をくぐるように、今日本に来ている人々にも同じことが起こっています。

あるベトナム人女性は、仏教徒の家庭に生まれ、幼くして両親が離婚し、祖父母のもとで貧しい暮らしの中に育ちました。そして、自分の努力で人生を切り開こうと、奨学金を得て来日し、博士課程まで進みました。しかし研究に行き詰まり、挫折を味わったとき、聖書に関するビデオに出会い、聖書を読み始めます。当時暮らしていた高知県で、通りがかりの教会の前で祈っていると、閉まっていた扉が開き、ご高齢の女性が「どうぞ」と迎え入れてくださいました。日本語は十分にできませんでしたが、主の不思議な導きによって信仰に導かれ、洗礼を受けました。燃えるような思いで神様を求めるようになった彼女は、やがて東京基督教大学で学ぶ者となりました。今は、日本で苦労している外国人に寄り添い、また自分に親切にしてくれた日本の人々にも神様の愛を伝えたいと願っています。故郷を遠く離れたことは、神様と出会うための、神様のご目的のもとにあったのです。

神は求める者にご自身を現してくださいます。そして、すべての人に悔い改めを求めておられます。世界を正しく裁く日を定め、その裁き主としてイエス・キリストを立てられたからです。キリストを信じる者に、神は罪の赦しと、神の子とされる特権を与えてくださいます。だからこそ私たちは、この救いを世界に宣言し、証ししていかなければなりません。

**まとめ**

海外の宣教を覚えて祈り、捧げ、自ら出て行くことは大切です。しかし同時に、今、世界が国境を越えてこの日本にやって来ています。日本が世界宣教の最前線となっているのです。神様が愛し、救いに導こうとしてこの国に運んできてくださった方々に、私たちクリスチャンは、日本の教会は、どのように接するべきでしょうか。神が人を動かしておられるならば、私たちはその人々に目を向けなければなりません。神が人々を求めておられるならば、私たちはその人々を歓迎しなければなりません。神が福音を届けようとしておられるならば、私たちはその器とならなければなりません。神を求めさせるために人を動かしておられる神の御業に、私たちも参与する者となりたいと願います。



左：いっしょにミッション！
となりびとチャレンジ
ワークショップ
下：世界宣教「子ども集会」

